
迷子

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷子

【Nコード】

N0717D

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

大人になったからといって、不安や恐れを忘れる事はできない。特に、こんな雨の日の夜は。

冬の雨。蒼く憂鬱な空の色を仰いで泣く子等の正常な痛みを伝える術はなく、電信柱の陰に隠れて、一寸先を凝視する野良犬の、彷徨のような瞳。

千円札を後ろポケットにしまい込み、黄色いビニール傘を差しているあの子。

何故、こんなに哀しいのだろうか。私は迷い子になったかのように不安を覚える。

ああ、そういえばこんな感覚だった。

私は知らない街に居る。見知った人も音も匂いもない。

私は幼い頃、そうしたように、不安を紛らわせようとして口笛を吹いた。

けれどそれは、空気を微かに震わせて、掠れた物悲しい吐息になっ
って消えた。

薄暗い地面の灰色と、水銀のように輝く水の世界。

往来する車のヘッドライトに照らされる度に、浮かび上がってくる自分の影すら、何か恐ろしいもののように思えてならない。

私は今、レインコートを着ている。肌に直接触れそうな雨の冷たさと不快感が鬱陶しい。

私の身体の輪郭をなぞるように滑る雨垂れの一滴が宝石のように光り、次の瞬間には消える。

宵闇の中で、不意に片方の手を掴まれる。私はそれを見ない。見てはいない。

「ねえお姉ちゃん」

いつでも私は私自身の為に手を差し伸べていて、その感触で安心できた。

「帰ろう」

私は、子供の私に向かって言う。私なら帰れる。道なら既に知っ

ている。

哀しいのは雨のせいじゃなかった。私が哀しかったのだ。彼女が寂しかったのだ。

私が送り届けてあげる。今ならそれができるから。

犬は居なくなっていた。黄色い傘のあの子も、もう家に帰った頃だろう。

街灯は青い炎のように淡い閃光を放ち、私は濡れた右手を額に当てる。

「冷たい」

夜のネオンが霞んで見えるのは子供の私が泣いているからだ。溢れてくるものは熱を持っている。肩の震えが止まらなくなっている。

水になった哀しみが、雨に溶けて滲んでいくのが分かる。

掴んだ手の体温は確かにあの頃の私のものだった。

幼い頃に置き去りにしてきた寂しがり屋の私を連れ帰る。

私達はマンションの自動ドアを潜った。見慣れたエントランスの床が二人分の足跡と涙で濡れている。

玄関から入った所にある大きめの鏡の中で少女が

「ありがとう」

と言った気がした。

部屋の中は静寂に包まれている。こんな夜は昔みたいに部屋を明るくして寝よう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0717d/>

迷子

2010年12月13日17時51分発行